

光 台 集 — 三光院殿家集 — 翻 刻

伊 藤 敬 *
遠 田 晤 良 **

ここに翻刻した「光台集—三光院殿家集」は、刈谷市立図書館に蔵されている写本（三・二一八四）である。江戸中期の写かと思われる。表紙左に

寄せて題簽があり「光台集 実澄公脉草 全」と墨書され、内題は「光台集 三光院殿家集」と記されている。大きき二三・四×一六・七釐。袋綴、本文墨付八四丁（奥書を含む）——ただし二分落丁、本来は八六丁となる。解題参照、——歌と題を別行にした十一行書きの体裁のものである（落丁の分は、他本にて補った。翻刻参照）。光台集の名を冠する写本は、管見に入った数冊のうち、この一本だけである。名称の由来は、実校の院号である三光院の光と、内大臣となって台閣に列したその台を組んだものであらう。即ち、三光院内府の集の意であらう。命名者、またその名称による流布のあとについては未詳である。

破損・汚損はない。同じく同所に蔵する一本「着到百首」（三・二二八三、最初の大永五年の着到百首によってこの名が付けられた。）に比すれば善本であるが、明らかに書写上の誤りと思われる点をまま有する。しかし解題で述べたごとく、精撰本乙類においては今の所最上のものであるので、これを底本とした。

校合には、主として、天理図書館蔵本「三光院集」（九一・二五・二三）と東北大学付属図書館蔵の狩野文庫本「三光院集」（第四門一〇六八三）とを用いた。いずれも底本より古い形——甲類——のものであり、両者の共通する面が大きかったからである。書写上の二段階を示しうらと思ったからである。他に、前記の「着到百首」（底本と同系の写本、かなづかい、誤写等からみて、時代はさらに下ると思われる。）、書陵部蔵「三光院歌集」（一五〇・五九四）（丙類）、高松宮家蔵「称光院三光院集」（一一〇）（甲類）、井上宗雄氏蔵「三光院集」（狹本）等を参照した。ただしそれぞれの校異は煩雑になるので、省略に従った。

終りに、今回の作業に寄せられた各機関、関係の方々の御厚意に対し、殊に、翻刻について御快諾を与えられた刈谷市立図書館、同職員の方々に、深くお礼申しあげる。

凡 例

- 一、仮名づかいは底本のままとし、統一することをしなかった。
- 二、異体・略体の漢字や変体かな等は、すべて現行の字体に改めた。また紙数の都合上、題と歌一行の体裁に改めた。
- 三、校異は、本文の該当箇所に傍書し、「天」（天理図書館蔵本）、「狩」（東北大学狩野文庫本）の頭文字をもって区別した。ただし、「天」と「狩」は多く一致するので、その場合は「天」「天ナシ」と記してある。「天」のみの場合「狩」のみの場合は「天ノミ」「狩」としてある。傍書の余白のないものは下に注した。その他の写本等もすべて頭文字一字をもってした。
- 四、定数歌順は（一）（二）（三）（四）とし、部類の部にのみ部立て別の歌順を付した。他本との校合検索の便のためである。
- 五、歌の出入り、歌順の相違等は各部立の終りにまとめた。
- 六、部類の部の詠出年次や歌会の注記は区別であるため、煩雑を避けて校異を略してある。これらの字句の差はさほど重要でないと判断したためである。ただし、底本にない場合はこれを注した。また、太神宮法集千首の場合のみ、春の部の五以下はすべて「千首〇百首」の型式に統一した。
- 七、合点は、すべて甲類写本にみえるものである。

光台集 三光院殿家集

(一) 着到百首 大永五年自九月九日至後十一月十九日

実世 于時十五歲

元日宴 音たてゝ打出る浪や山河の水をたゞくはるの初風
余寒 朝またき野辺は霞のひま見えて緑色こき草の村く
春氷 梓弓はるの門めを雲の上のけふのともねの響にそぎく
若草 うへ置し垣ねの梅の花もあれとけふもや野への春にくらさん
賭射 はかなしや子を思ふやみにたつきしの霞の内にまよふ心は
野遊 そことなくあかるひはりも半天にいかなる雲の床さたむらん
雉子 入日さす夕紅の色深くおもひみたれてあそふいとゆふ
雲雀 秋の夜の千里をかけてみし月も霞にこもる春の明仄
遊糸 淹のいとくり出してや長き日を吉のゝ山の花にくらさむ
春曙 散しける花吹たつる春風に浪をそかくる志賀の山越
遅日 けふといへは物いはぬ花も三日月の光にちよの色やそふらん
志賀山越 名にしおふ井手のかはつのなく声は春も夕の哀そひけり
三月三日 けふそ思ふ花ものこらぬ木の本をしめても春の形見成とは
蛙 今よりの故郷いかに夏ふかくしける草葉に道は絶けり
残春 あさみとり木々の青葉も神無月しくるゝ比に色やかはらん
新樹 今よりの故郷いかに夏ふかくしける草葉に道は絶けり
賀茂祭 神垣に行末とをしあふ草幾代かけても同じ二葉は
鶉川 鶉かひ舟いとひやすらむかゝり火の月に成行せゝの川なみ
夏夜 まとろまで幾夜なれけんみしか夜の月にことゝふ山郭公
夏衣 夏といへはかへし衣のひとへたにこち吹風のへたて有けり
扇 手にならず扇のかせもさ夜更に更に夏なき閨の内哉
夕顔 ほのかなる入日かくれの垣ねをもさたかに見する夕顔の花

晩立 空はまた跡さり晴て山風の越行末やゆふ立の雨
蟬 かねてより秋やかなしき空蟬の木葉の露の朝夕になく
残暑 秋やこし袖にはしらぬ風の音を四方の草木の上にとははや
乞巧 雲の上に手向る琴のしらへにも引やほとむる星合の空
稲妻 はかなしや草葉にやとる露よりも猶消やすき稲妻のかけ
鶉分 風の音にうつら鳴なる夕暮はまのゝ入江の浪や立らん
野分 しめをきし花の千種も時のまの野分になして身をくたく哉
秋雨 秋きては色こき木々のみとりをもいかなる雨の染かへすらん
秋夕 露ふかきかきねの虫の声も又秋は夕のものにそ有ける
秋田 山田もる賤かこゝろやいかならん稲葉をすくるささの声
鳴 ねやのうちはまた夜深くも明やられてね覚しき鳴の羽かき
広沢眺望 月はいま山のあらしも音絶てしつかにすめる広沢の池
葛 露霜やかゝれる葛を染つらん軒もかきほも色つきにけり
柞 下草は紅ふかく色つきて柞のもりの露やいかなる
九月九日 した露の淵と成まで君か代をけふしら菊の花に契らん
秋霜 わかの浦やあしへの鶴もをく霜に秋長しとや鳴あかすらん
暮秋 程もなく暮行秋の形見とてのこるかひやはあり明の月
落葉 村しくれそめけんよもの梢をもけふ吹つくす山風の声
残菊 くれなゐに又さきかほる白菊は色を霜やよきて置らん
枯野 虫の音も霜かれはてゝ秋草の花の跡なき野へのさひしさ
雲 かきくもり幾夜みその音さえて雪けに残るよものうき雲
野行 嵯峨の山けふのみゆきの折にあひてあられも草の玉や散らん
冬朝 明わたる雲あはるかに行月の影きえ残る庭のしら菊
寒松 夕まくれさゆる嵐の音そふは波やこゆらん末の松山
椎柴 山里はとふ人もなししる柴のしはしたのむ此世なからに
衾名 閨のうちにひとりふすまを引かけてもり明す月の影そさやけき
初恋 かゝけつる竹の灯さ夜更てつみもやとみに消むとすらん
忍恋 我なから心の奥もしらぬかな昨日はあらぬけふの思ひに
聞恋 いかにせむいはての山のいはすともしくれや袖の色にしまし
なかつていふかひなしや行雁の声はかりなるくものまよひに

見 恋 行末のちきりもしらす徒によそにや人を見てもやみなむ
尋 恋 たとりこしかひこそなけれ三輪の山あらぬ嵐の身をしほりつゝ
祈 恋 くりかへしかけて折るもかひなしや絶ぬなけきの杜のしめ縄
契 恋 たのめてし跡こそなけれ吹風になかむる末の空のうき雲
待 恋 なかめしと思ふ物から夕間暮まつは嵐のさはきもする
遇 恋 から衣今宵かさねし袖の上はせきあへさりし涙ともなし
別 恋 うき物とおもひなからも在明の月はわかれの形見なりけり
顯 恋 袖の波むねの煙のたえすのみたち出てよそにあらはれにけり
稀 恋 たまさかに逢瀬なからや織女もたえぬ契の末頼むらん
絶 恋 逢こともなからの橋の絶はてしむかし語にならむとやる
怨 恋 それそとはいひもやられぬ折／＼のつらさやつもる恨なるらん
旧 恋 年月をたえぬ思ひに送りきて身の徒にくちやてなん
曉 恋 ひとり寝は別にもあらぬ鳥の音におとろく夢の名残をそ思ふ
朝 恋 しれかしな草葉の露も出る日にきえかへりつゝおもふ心を
昼 恋 浦波もしほのひるまはあるものを思ひそたえぬ我涙かな
夕 恋 まちなれし幾夕くれの萩の音の心くたけて物思ふらん
夜 恋 あはぬよを何歎かまし床の上にならずかよふ夢も有せは
老 恋 たまさかにあひみる夢もいたつらにさめてや老の思ひそふらん
幼 恋 しれかしな露のみふかきくれ竹の若はをわたる風の心を
遠 恋 思ひやる心は雲をへたてしをさかひはるけき中そわりなき
近 恋 かくはかり何したふらむ中垣のへたて在ける人のこゝろを
旅 恋 わかれこしその俤はたひ衣過ゆくあとにかへる浦波
寄月 恋 めくりあはむ契もしらすゆく月の影ほのかなる思ひ添ぬる
寄雲 恋 絶すのみ心は空にうき雲の行かたもなき我思ひ哉
寄風 恋 夕まくれ萩の葉にをく露なれや風に消ても物思ふ身は
寄雨 恋 さつきやみいかにせよとか降雨のはるゝ時なき物思ふらん
寄煙 恋 せきかたき涙のみかはおもひゆへこかれてたえぬむねの煙よ
寄山 恋 尋見むつれなき人の心にも思ひ入さの山路ありやと
寄河 恋 よるへなく思ひみたれて河の瀬になひく玉藻の身をやつくさん
寄海 恋 かきりある夜の思ひはわたつ海のちひろの底も深からぬ哉

寄閑 恋 幾夜をかわか通路の閑の戸に打もねられぬ物思ふらん
寄橋 恋 たまさかにふみみる事をうつゝにもしはしなさばや夢のうき橋
寄草 恋 うつろはむ物とはしらぬ月草の露ことならぬ人の心は
寄木 恋 桐の葉もおつる涙の敷そへて人のこころの秋そしるゝ
寄鳥 恋 千鳥なく入江の波によるといへは我もねに立物思ふかな
寄獸 恋 まてといはゝ虎ふす野へもいとほしな逢にかへなん命と思へは
寄虫 恋 夏むしの身よりあまれる思ひたにひるは絶まの有とこそ見れ
寄笛 恋 笛竹の本の心のまゝならはかりつらき音には立まし
寄琴 恋 待にさてかよはざりける琴の音はたか別をか引とゝむへき
寄絵 恋 面影をうつしとゝめし筆の跡のかはらぬ色を心もかな
寄衣 恋 ふきかへす衣のすその恨をほうき秋風にかさねきぬらん
寄席 恋 いまはとて独ぬるよのさ筵にかたしく物や涙成らん
寄遊女 恋 誰となくむすふ契の一かたになみのうきねの定なきかな
寄傀儡 恋 かゝみ山たちよりしよりさま／＼に移る心の色は見えけり
寄樵夫 恋 山人の棲はしらす斧の柄のくつるは袖の上とこそみれ
寄海人 恋 浦にたく海士のもしほひ下にのみむせふ煙の絶またになき
寄商人 恋 よそにのみみわの市人立さはき下やすからぬわが思ひ哉

(二) 冬日侍 大聖歆喜尊天宝物前詠百首

從二位行權大納言藤原朝臣実世

立 春 幾めぐり同じ月日もけふに明て光くはゝる春はきにけり
子 日 引うへし根ざしとゝめて姫小松宿にかはらぬちよの陰みん
霞 紅のにはひは花のにしきさへたちも及はぬ朝霞哉
鶯 ときぬとなく鶯もいやとしのたかきにうつる道やしるらん
若 菜 春日野にいはふ若なのわかえつゝ万代ちきる末そはるけき
残 雪 都よりまつ消そめて面影の遠さかり行嶺の白雪
梅 行袖にうつしとりても本つかはちるへくもあらぬ梅の下風
柳 青柳の手くりになして引糸のたよりもなしに幾春かみん

埋 火 除 夜 初 恋 忍 恋 不 逢 恋 初 逢 恋 後 朝 恋 遇 不 逢 恋 旅 恋 思 恋 片 思 恨 晚 松 竹 苔 鶴 山 河 野 関 橋 海 旅 別 山 田 懷 夢 積 教 旧 家 家 路

長閑さは春にも成ぬ空にたく梅かゝ深きうつみ火のもととます火のしけき光もさ夜更てなやらふ声に年暮ぬるいまをその心にかなふはしめにくちぬ契りの行ゑとかないつまでか人めよかましともすれはもれいつる名のよそに苦しきよそにしてまた見ぬ人も言の葉の往来はかりはさすか馴ぬる若草にむすひかへしは新枕わか心にもあらぬ物から
おき出てむかふ鏡の朝ね髪ならへるかけはくもらさるなむわすれなん思ひもいてし世語に残るつらさの今は悔しき
船出しておもふかたなるうら風にぬれにし袖も今やほすらんあらためて憂にはもるゝ身ならんとすれはかゝる思ひもそふ心こそ同じすちにはあらずとも我おもふほとをしる人も哉
よしやたゝ思ひは入れし思ひけつ心のこるうらみやはある夜をこめて星をいたゝく黒髪のかれすつかへんよゝの雲にちりうせぬ松をためしに言の葉の今一しほの色をまたなん
おもふそよ竹のこのよの中にしもすくなる道を心なりとは世にすみて衣はこけをからすとも塵にけかれぬ心ならばや千年てふ末そはるけきふへき世にまた雛鶴の程をしるにもつくり置し神代の山のうこきなく妹背絶せぬ道をしそ思ふ世とゝもになかれて絶ぬ山河やあさきもあらぬ水の水上
おなし野の露の恵みも春秋の千種百草色や分らん世中よ道の外なる道しあれば人の心の関はゆるさし
朽すともよきてやゆかん板橋のあやうき道はふむ空もなき行かへる船路かはらて越の海の浪風しらぬ便うれしき
我ゆかて思ひやるにはその程と日数をはかる旅ねくとしきこゝろゆく道よといそく別路はふかき名残もあらしと思ふ
朝夕のけふりにきはふ山陰に柴ふる人の家ゐをそしるかりはこふ時もきにけり小山田の千町の稲葉手にまかせつゝ世にしたふ親のおやなる子の子にて立もつゝかぬその名をそ思ふ嬉しさを思ひあわせて見しことを正しからなん夢の行末
わするなよ誓の海の渡し舟たのむしるへはこの世のみかは

述 祝

懷

かつ見るも猶たのまるゝ行ゑ哉いのるしるしも仰く恵みもおもふことまとかにみてる玉のをどのはへてふへき千代の宿も
天文十一年壬寅孟冬吉辰 願主 敬白

註、刈谷「着到百首」本は、雑の部「鶴」より「田家」まで二十二行十一首つまり一丁分が落ちてゐる。

(三)

天照神の御代に此豊葦原の中つ国をおさめ給はむとて皇御孫の尊をくたし給し時先日向国高千穂の嶺にあまくたり給て神代のほとは只西のほとりをのみしろしめしければいまた国々もあまねからすや有けむ人の代となりて東征の力を尽し給事かざなりてそ我みかと六十余州はひらけ侍るなれそのはしめなりしゆへにや西の国に人の心もさどくかしきためしに申ためりしかはあれと大和言の葉は人曆か身をあはせたとてまつりし御門より取分てひろまりしかは家こそりて風をしたひ世まつりて塵をつき礼楽の本としてふけり翫はぬ人なしさりければ都の外には其名きこゆる人も稀なりしそかし今はまして弓を袋にかくさずつるきを箱におさめぬ世と成て家々おとろへ道くゝむもれはてぬれば春の色のいたつらにうつろひ秋の錦もむなしくたちすてゝ都は只名のみとまれるに似たりましていつくのくまにか心のたねものこり詞のきさしもとまるへぎとなん世をおもひけち侍るに修理大夫義貞とか聞ゆるは松浦の沖の風をしつめて立ぬる浪さへ音たてぬはかりおさめしる国と成にし事もたゝ道ひろき文のおきてにしたかひてほとりまで人の心やはらけるになんありけるかくてそのかみ雲の雁の便はかりは待みる事も待しかとひなのわかれにとし経にし後藻塩草かき絶にしを野中の清水くみしれる本の心わすれすしてふりはへにたる音信のみにもあらず浜の真砂かすく錦かさねたる巻々ありたちぬふかと見ゆる言の葉のあやは牛女つめもうらやみぬへくそめいたす心の色は立田姫も

及はぬきはやあらむ誠に生れなからの天才をえたるこゝろをきてにこそ今の世にくらへむには又誰かはとあやしきまでにそ覺え侍るかゝるにつけて此くさのよしあしわきまへかほならむもかたはらいなければとかくおもひやすらひなから巻返しつゝ見侍るに吟にひかれ興に乗するにやありけむこゝろも空にて我にもあらす批点とかやいふなる事まねひ侍ぬかくても猶物に感ずる心のたえさりけるにや嬰兒か立て舞けむやうに題にひかれてあさき根さしの百くさひきそへつればいとゝ老の朽葉花をもしらて玉山にかはらを擲つ後のそしりもつゝましくなむ

詠 百 首

亜三台 実 澄

(春 二十首)

元 日 あら玉の年の朝の日のひかり都の春や四方にみつらん
雪中驚 おもかけの花をやさそふ鶯の木伝ひちらす雪の衣 毛衣云
野外霞 心あてに山あるかたと認めかは霞に野への果やなからん
野若菜 契らぬもさそふ若なにひかれきて誰しめし野とわく袖もなし
梅花薫簾 身にしむや釣簾より匂ふ追風 あまる風にいつれを梅とまかふ匂ひは
行路梅 名残なくもき木に成ぬ玉鉾の行手の梅は折ものこさて
若 草 立かへる春の緑は冬枯に霜や草はの種をまきけん
岸 柳 つな手ひく柳の糸にまかせはや岸をはなれぬ春の川舟
河上春月 ゆく水のなかに見さりし川隈は曉月夜の影にそ有ける
海辺春月 朝夕にさなからむかふ浪の上もかすむか月も阿波門はるかに
婦 雁 来る空の契にかへて目のまへの雁の別をとめてしかな
遠村初花 日にむかふ木末ははやく色みえて花にまちかき山本の里
花盛久 幾年の限もあらぬ春毎に心なかくや花に馴まし
山路花 ちるまでと一木くゞに日数へはまた見ぬ山や花に残らん
水辺花 むすふ手の雲そかほる咲しより下行水に花にそめけん も咲もイタダ
落花隨風 うつろはてとまる草木もなき物を風こそ花の心なりけれ

遅 日 かたふくとみえても更に暮らてけさを忘るゝ春日影哉
里 款 冬 咲比はうとき隣の里人も八重山吹のへたてやはある
池 藤 松たてる汀をこめて咲藤の花にそくるゝ池のをし鴨
暮 春 やよひより暮なはくれめ遅桜根にかへらすは春もゆかしを

夏 十 首

卯 花 きゆる目をいつとしらぬ卯花の塩津の雪や越の白山 塩津(天)
待 郭 公 よしやとは思ひたえても時鳥なかくにはれぬ夕暮の空
郭 公 一 声 心にもあらでもれなは時鳥一声ゆへや忍ひはつへき
虚橋驚夢 まとろまぬ透間の風のまくらかや夢路に生る軒の橋
庵五月雨 かり初にさすや庵の草ふきも半くち行五月雨のころ
夏 草 しけるをは心のまゝにまかせまし秋まつ草の花もあるやと た(天ノミ)
鶺 鴒 川 川上にくらふの山を尋てもみしか夜しらぬ鶺鴒さゝなん
里 螢 あまのすむ家のもまれの藻塩火に数そふ暮や螢成らん
遠 夕 立 山めくる時雨の空やかへるらんかたわく嶺の夕立の空
樹陰納涼 暮行は早袖さむし水無月の照目にならせ木々の下道

秋 二十首

初 秋 露 いつしかもをく露 珠(天)見えて色かはる木葉におもぎ枝の朝露
七夕後朝 行やらてとをき渡に成ならん帰るあしたの天の河舟
庭 萩 一むらにうへし心やたかふまで風さへしける萩の音哉
霧間草花 たちならす隙こそわかね秋の野の花の香さそふ霧のかほりは
朝 萩 おき出るとのゐの袖に萩の戸の花摺衣 お天ノミかさねてをきん
夕 薄 山ちかき入目をまねく花薄道行人にくれを お天ノミしむらん
露 底 檻 いとふらん日影もさそな浅はかに露をきかくす檻の花
月下虫 はしゐして月にと移す床の下にしたひやきにし鳴蛭 春たて天ノミ
月前初雁 数もなく月におほへる一行はことしす立し雁もきぬらん す蛭
月前掃衣 うつ音のさむき衣の白妙に霜をかさねてすめる月哉
在 明 月 待いてし月のうらみは数ならて明仄つらき半天のかけ

秋夜夢 明るまつ板間□路につれもなし秋はなか／＼夢そ短き
 秋夕感思 おもほえず誰か黒かみもうき秋の夕／＼や色かはるらむ
 閑居秋風 とふ人に思ひなしてや慰めむ松の戸た／＼嶺の秋風
 田家鹿 里ちかき田面をよきて鳴鹿やおとろかされし多成らん
 杜紅葉 折人にまかせはて／＼下紅葉杜の朽葉となしてみましや
 柞紅葉 一しほをしめてもそめは柞原しくれや浅き色と成らん
 秋夕鐘 秋さむきはやしの鐘のひ／＼きにや鳥はねくらを定かぬらん
 菊霜 うつろふもあらぬ盛の秋の菊朝をく霜はけたてこそそめ
 暮秋 おりしもあれみしかき秋の日の影はけふに暮しを惜むまでなき

冬 十 首

初冬時雨 空はまた立もならはぬ雲なれやけさは時雨しけしき斗に
 庭霜 分かねし道やいつこと霜をへて陰ものこらぬ庭の浅ちふ
 谷落葉 散ま／＼になかれてとまる谷水を峰の紅葉の淵となしてん
 深夜寂 明かたも早いか／＼し宵のまに聞し寂の音そさえゆく
 冬月 めてさらは心浅きに成ぬへし月に誰かは冬こもりせん
 池氷 根をたえてた／＼よふ池のうき草もさそふ水なき朝氷哉
 浦千鳥 立空もおなし行多の友千鳥はまゆふほととの隔もやなき
 岡雪 おもひ出ることをおほるの雪の中も詠にかよふ岡のへの松
 常盤木雪 花にをくれ紅葉にもれて松杉にかけてやまちし枝のしら雪
 歳暮雪 一年もかくてやくれし見るか内も雪の積るそ目数成ける

恋 二十首

聞恋 たつねはやさこそ深き窓の内もより匂ふ名はつ／＼みはてしを
 忍恋 いは／＼こそ心をしらめ人はそのあさきおもひや色も見ゆらん
 顯恋 あたなりし花田の帯にひかれきて中の衣はほころひにけり
 近恋 おもひ忙こゑきくまでの櫛の戸もかため置てし心つよさよ
 遠恋 あくかる／＼道やはさはる岩ねふみかさなる山に山はそふとも
 疑恋 ことよきは詞おほきも実なき世のならはしに何をたのまむ

待恋 はかなしやこぬ人ゆへにさりととも心のくせのいそく夕暮
 逢恋 するといへは枕やあとにもらさましさめぬ夢とはなしはてぬとも
 別恋 立いてむ空こそなければ衣／＼にならへる人やおきわかるらん
 被厭恋 数ならぬ我をのかれむ心より塵もつけしと身をも立けん
 借人名恋 よそにして我いひなしの濡衣もにくからぬには恨さらなん
 忍見書恋 幾度かひらきさしつ／＼しらせしと見はてぬ文を灯の本
 寄月恋 見るらむとおなし心のなくさめいむてふ物と月にむかは
 寄山恋 とたえかは我ならぬ人や敷妙の床の山とは口かためても
 寄閑恋 下にのみ思ひかはせと閑守の心をはかるほとそくるしき
 寄杜恋 散やすぎたよりの風の言のはに幾度胸をこからしの杜
 寄朽木恋 柚川のくち木に身をはなしはて／＼ひく人なしや歎せよとや
 寄埋木恋 人しれぬ物とは何かたのま／＼し埋木とても名やはかくる
 寄初草恋 しらさき若葉あやしき初草をこき紫のねみん物とは
 寄思草恋 いへはえに乱そまざる思草葉末の露も千／＼にくたけて

雑 二十首

名所松 徒にふりぬる名のみ高砂の松のおもはむ老の行末
 名所月 ほかに見ぬ月やすむらん富士のねは空の半の雪の光に
 山雲 動なき山とはいはし朝夕に雲の立名のかはる姿を
 野風 風やしる緑にみしもうら枯のいつれを野への色に定めむ
 旅行 思ひたつ程そはるけき旅衣千里も道のはてしならめや
 旅宿 うちつけに見し人かほのかり枕やとしなれたる心をそしる
 旅泊 こき入て湊にかゝる沖つ舟風さたまらぬ空やよくらん
 田家煙 小山田の水の煙も立そふやかひやか下に音むせふ也
 山家鳥 いかばかりふかき限の山ならし稀にもきかぬ鳥の声哉
 古寺燈 世をてらす高野の峰の灯にその暁の光まちなみん
 暁更寝覚 なかき夜もあかてや明む君を思ひ人をうれふる老のね覚は
 往事如夢 ぬるかうちの夢は中／＼定かにてこしかたの世そ跡はかもなき
 独述懷 思ふこと同し心の筋ならは身のかた糸もよるへ有なん

老後述懐 百歳のなかはも過ぬ時を得る世にひかれても末はたのます
寄月懷旧 めて来しを人に忘れぬ歎かなよしや月をも馴しと思ふ
寄日懷旧 見し世をも今も昔と忍ふかなけふは昨日に又かはりつゝ
寄草無常 あはれいかにとふ跡みえぬ草の原その名斗を面影にして
寄煙無常 形のみきえても消ぬ人心けふりの下に残らずもかな
神 祇 垂乳根の身をわけいてし身を捨ていつくのよそに法を求めん
かけ初し岩戸の前のその世よりかゝみの神の宮あすらしも

右以実陰中將本令書寫了(符)

註、底本の部類歌と重複するもの、遠村(初)花・山路花・往事如夢・

老後述懐(月前懷旧)。

天理本部類歌に重複し、有端の注記をもつもの、帰雁・夏草・里
螢・月前掃衣・秋夕感恩・谷落葉・名所月・山雲・野風・旅宿・往事
如夢・独述懷・寄煙無常・釈教、有端の注記なく重複するもの、秋夕
鐘・常盤木雪・老後述懐。

(四)

江東遊士 実 澄

立 春 我君の為とやなく久堅の月日とゝもに春立らしも
朝 霞 暮ぬへき夕もしらしのほる日のけさに遅く霞む空哉
谷 鶯 山松の喬木にうつる道しあれや古巢の谷を出る鶯
残 雪 みせはなや山は不二のね春なから残るは雪のたくひ有とも
若 菜 うれしさをつゝむにあまる春なれやたまふ若なを受ける秧は
里 梅 鶯のぬふてふ花のかさしにもみかさの里のかけたのむ也
梅 色も香もむかしのごさに咲梅やふりぬる軒のしるへ成らん
春 月 こしかたにかたみなはてそ行めくり終に澄へき宿の月かけ
春 曙 長閑なる世には心もをのつから春の物なる明ほのゝ空
帰 雁 うらやまし帰るさいそく雁の声さはすとてもこふる都を
春 雨 わきてしもふかき恵みに武蔵のゝ草葉あらはす春雨そふる
岸 柳 ぬきとめよ岸による波ちる花のちよの数見む青柳の糸

待 花 かたはらに身の埋木もいつかはとさすかに花の春は忘れす
初 花 春をへてふりせぬ色のはつ桜若木にかへる花かあらぬか
見 花 めかるれば忘れぬへきことはりも身にはしられぬ花の比哉
花 盛 咲花の色もときはならはなん榮行春の行末の宿
落 花 おしみこし花も今年は老らくの道まかふかにちらはちらなん
款 冬 をく露の玉もてはやす言の葉や金花咲きの山吹
池 藤 松か枝にかねてそ見ゆるとはかりや池のかゝみも匂ふ藤浪
暮 春 いくかへり年／＼なれむ花ことの春の日数は行にまかせん
更 衣 世をなてむ袂をいかて夏衣またきあやなく
卯 花 月雪の色はさなから一とせの光をこめてさける卯花
待 郭公 しるしらぬひとつ心に時鳥よには初音を思はぬはなし
聞 郭公 おもひ出るふるき都の古声もいつかは聞む山郭公
郭 公 稀 時鳥わかをこたりや恨むらんかへれと告る声も間違に
故 郷 橘 ふる郷を出し名残の袖の香も今こゝにとや匂ふ橘
早 苗 我門になをとりそへて民の数の千町の早苗なるらん
五 月 雨 照日さへるほふはかり世にひろき人のめくみや五月雨の空
鵜 河 風 河風も鵜舟の綱手うちへてさしのほるせの波もはるけし
鰻 螢 夏刈の草の枕にとふ螢五の秋よいつか過けん
夏 草 花をまつ草の笹の撫子にこゝろの露をかけぬ日そなき
夏 月 白妙の真砂の月にゐる鶴や夏にしられぬ霜の毛衣
夕 立 山河や浅瀬を見し時のまになかれあまたの夕立の跡
杜 蟬 しけりあふ杜の木葉になく蟬やみとりをひろふ糸竹のこゑ
夏 被 行末をいの千年に御被河神さへなひく瀬の白ゆふ
早 秋 燈のものとの心もさらに又したしきまての秋の初風
七 夕 織女の契りそためし思てふねかひの糸のゆらく玉のを
萩 風 吹からにそれもなつかし転ねのいさめに似たる萩の上風
萩 露 折袖も錦と見えてま萩原色に衣をそむる朝露
女 郎 花 立田姫たてる姿は女郎花なへての花の色としもなき
夕 虫 ふかみとりあらそふ斗夕霜の下につれなき松虫の声
夜 鹿 くりかへし正木のかつらななき夜も尾上の鹿のあかすとや鳴

初雁 おもふには「もなしや旅にしたりまぢかき初雁の声
うき世てふさかをもしらし墨染の夕の秋にすます心(刈菰ナシ)」
山月 まち出る都の山にそれとみよかたふく月の東路の空
野月 をしなへて露や置らむ春日野のかけの小草に月そやとれる
河月 とこなめにたゆることなき吉野河影ひたす月に幾代すますましし
江月 思同志まほしきよをいたつらに入江の月も影惜むらん
浦月 月も今光をそへよ船人のしるへをおもふわかの浦波
籬菊 仙人の齡なからに移しうへて山路尋ねぬ庭の白きく
暈衣 七重にもたちかかねてよ千度打声も夜寒の秋の衣は
岡紅葉 天地のひらけし霧もかくこそとまた色わかね東雲の空
庭紅葉 染そめすふかきもみちの名成けり八入の岡の露も時雨も
九月尽 わか宿の杵のもみち秋にしもあへす散なん陰とやはみし
初冬 身につもる秋なおしみそ人は世に年たかきもそ心なるへき
時雨 名もしるし春といふなる神無月寒き日影も「
落葉 ほしあへす時雨さりせは常盤木の深き緑の程をみましやの(天)」
朝霜 敷島やしけき詞のはやしとて積る落葉の散もしられす
寒草 うき旅のやつれをはつる朝毎の鏡の影も霜やをかまし
千鳥 下萌の春を心の冬草の古葉の露もの寒けさもなし
水鳥 八千代てふ幾諸声の友千鳥浜の真砂の数やまかせん
氷始結 夜嵐のしつまる浪にうかひ出て世をやすけなる池のをし鴨
冬月 まなふへき道にそ思ふ「中本の水より出てさむき氷を
鷹狩 春まちし心あさゝよ冬のよのかすまぬ月に匂ふ梅かゝ
野霰 たえし世を今しもおこす道しあれば狩はの行幸跡もみつへし
浅雪 風まぜにまなくも散か玉散冬野のお花袖のせはきに
積雪 花ちりし春の苔路にまかふまで降もかくさぬ庭の初雪
閑中雪 塵泥の山と成にしそのかみも今みるそかりふれる白雪
歳暮 草の戸は跡たに見えぬ雪の上にたかくふしけん心をそ思ふ
十かへりを又そかそへむ七十にみちぬる年はけふにくれても
本(天)
弘治三年卯月廿日

一 立 春
二 早 春 雪
三 早 春 雪
四 朝 子 日
五 霞
六 憐 霞
七 山 霞
八 連 峰 霞
九 孤 島 霞

天文十七太神宮千首御法
山松のみとりにかへる春風や下つ岩ねも氷とくらし
天正三六廿五聖廟法家百首十七首ノ中
くもりなき都の空の朝日影立かへる春の道はしるしも
千首御法家当座、御会第六百首(狩)
春やときこほす斗に降もたゞしはしの程の枝の淡雪程の(狩)
同上、 第二百首(狩)
年さむき後あらはれん千世の色を子日にこむる野への朝霜
千首初百首
久かたの天のうき橋幾めぐりかはらぬ春にたつ霞哉
花に咲もみちに見する木々の色も春の霞や染初むらん
元龜三飛鳥井亭当座、二首之内(狩)
名にたかき天のかく山夏を置いて霞の衣今やすつらん
春といへは浅間の嵩も富士の根も煙は消て立霞哉
元龜三廿二水無瀬法家、十首之内(狩)二廿二(天)
さらてたにはなれ小島のなめさへいかて霞のよを隔らん

春

右七十首賀称名院右府七旬算和歌歟彼慶賀事弘治二年四月
廿五日九条禅閣被興行之但禅閣記不被載此七十首事又此本
奥書注弘治三年四月廿日之由年月相違不能無疑勘之三光院
蓮府久被寓居駿河国因茲不会彼賀席而後年聞之遙被賀父公
七十算者歟仍岸柳夏被歲暮等和歌祝千年退齡又若菜歟冬兩
首謝禅閣興行花盛落花暮春等亦彼祝壽儀也此外春月帰雁郭
公等詠述在他郷慕故郷懷殘雪郭公稀故郷橋叢螢山月朝霜等
似皆發遠客旅情者歟方今定基臨類聚之時聊註子細備後覽者
也 (天ナシ)

註、
「秋夕」底本になし、他本により補う。
天理本部類歌に重出し有端と注されているもの、岡紅葉・野霰、有
端の注記のないもの、里梅・見花・夏月・夏草。
岡紅葉は、天理本以外の部類では、題のみで歌本文を欠いている。

二 鶯 知 春
律の音のしらへをかふる糸竹にさそはれ出る鶯の聲（作の鶯イ）
ふきしくは風と思ひしを八重霞ひまあらはるゝ鶯の聲（元龜二正十七飛鳥井亭当座）
三 竹 裏 鶯
道しあれば竹の千尋にすむ鳥もあひ宿り（せか）をよ宿鶯（せよ天）
四 鶯 是 万 春 友
君か代の春幾かへりいやとせのたかきを思ふ鶯の聲（元龜二正廿家月次会始）
五 鶯 有 歎 声
世におほふ春の光をよはふなる三笠の山のうくひすの聲
六 若 菜
もえ出る若菜の色もつむ跡もいつれよりかは雪の村消
七 春 雪
ふりそはて残ると見しや咲きぬへき花に待へき木との白雪（天ナシ）
八 松 残 雪
うつもれぬ雪ましられて松かえにさへかへる風も春そすくなき
元 梅
梅かゝにゆるすもいかゝ山さくらいとひはてゝし花の風を（千首第二百首）
三 梅 始 開
なへて世のにはひに成ぬさく梅の枝よりいてゝ風や吹らん
三 梅 薫 風
花のかをさそふにはあらて咲梅の枝よりいてゝ春風そ吹
三 夜 梅
おとろかす夢もわりなし梅かゝに東風ふかはとは思ふ物から
三 里 梅
木のものもありかはしらす春風の幾里かけて匂ふ梅かゝ
四 梅 処 々
身ひとつをちゝになしても梅かゝは花の幾かも袖ふれてみん（元龜三正十九内御会始）
五 梅 有 色 香
わきてしも八重咲梅は菊の露紅葉の霜も枝にこもりて
色に出かにあらわれて世を春の光は梅の花にふかしな
六 梅 交 松 芳
鶯の羽風は鶴のはふきまで松を忘れて匂ふ梅かゝ
元 梅 万 春 友
ちりうせぬよをかさねきてことのはの花の主に匂ふ梅かゝ
三 柳 糸 新
かつそめて立出けりな咲花の錦をまたぬ青柳の糸（二首懐紙）
三 岸 映 水
なひきふす陰にむれめて水鳥の青はもわかぬ岸の青柳（千首第九百首）
三 早 蕨
をそくとき柳か枝は河岸にあさ日夕日の色や分らん（千首）
天地の外ならはこそ早蕨も君かめくみにもれてとらまし

三 野 早 蕨
天正三七廿八所定神明法衆
もえぬやと分にし袖の下蕨けふはなやきそ野への萩原（天）
四 樵 路 早 蕨
おりとるもひろふも袖にいとまあらしま柴に交る峰の早蕨（年月日御会）
五 春 月
いつとは月もわかしを面影のはるの物とてかすむ空哉（元龜二正廿二当座、二二二二天）
六 春 晚 月
秋風に見しは影かはかすむよを思へは春の月そさやけき
七 春 晚 月
花もいさとを山かつら在明の光をかけて霞む匂ひは（千首第二百首）
八 春 晚 月
まれにあふはなをや思ふ月たにもかたふきやらぬ春の曙（千首第二百首天）
九 春 月 言 志
さやに見ぬ朧月夜の短かさはたかあやにくにしたひ馴けん
四 春 雨
春さむみこゝろもとけぬ花の枝は今一しほの雨を待らん（草緑三九石山法衆統百首）
五 故 郷 春 雨
花の上に心をかけて窓の中は打もねられぬ雨の音哉（千首第四百首）
六 岡 春 草
人めなき笹の門は春の雨に跡見え初る雪の村きえ（千首第九百首）
七 帰 雁
ちりはてし春の花園今よりや木の下草の秋を待らん（露天）
八 晚 雁
見すてゝむ波の春かは常盤なる松もこそあれ帰る雁かね（いそイノミナシ）
九 野 遊 糸
春さむみまた下萌の若草にあさる雉子の雪まゝつこゑ（比イ）
野へに出てくるゝはおしき春の日をつなきもとめよ遊ぶ糸ゆふ

此和歌者長淳中納言管戲内府曰君妙処甚不可及若頼作者不可相劣内府曰試欲為勝負如何納言曰可詠百首歟内府曰何以百首為勝負哉可詠千首歟納言曰日数如何内府曰以今日為始以詠終為限納言諾抑此事内府多詠和歌頗被沈吟仍如当座会度々及遅引故也既長淳卿詠始之後經三日送使於内府許曰僅詠五百首公如何内府被答曰既詠千首畢今清書之内府更赴納言亭携彼詠草納言驚見之頗称不及之由内府曰君不能終功予雖独詠之無其詮忽被破却之其破牒之余今在三条家実教大納言被談申於敝閣乃令暗誦之給是其一首也（天ナシ）

癸 春 日 遲

癸 故 郷 桃 花

癸 躑 躅 紅

癸 燕

二〇 款 冬 露 繁

二〇 里 款 冬

二〇 款 冬 散

二〇 松 間 藤

二〇 池 藤

二〇 戸 外 藤

二〇 留 春 不 註

二〇 暮 春

二〇 暮 春 月

二〇 暮 春 月

二〇 暮 春 殘 花

二〇 三 月 尽

二〇 三 春 天 象

二〇 四 春 獸

二〇 五 陽 春 布 德

二〇 六 迎 春 祝 君

二〇 七 春 松 契 千 年

癸 句

仙人のななき月日を春の日の光にこめて行年もなし

天^文七^六廿^四（天ノミ）きてみよといはぬ垣ほも桃花いくその人の道をなすらん

花の色に打出けりな岩つゝしもゆともみえぬ中の思ひを

玉たれのへたてや思ふあかすのみ爰に馴きてかたる燕は

朝夕に露けき色はうへし世の袖をやしたふ山吹の花

とふ人もなくてやちらむ山吹の花にも宿は八重葎して

千首^{第二}百首^{百首}山吹はかるくちるへきたくひとや秋の朽葉の色に咲らん

日吉^法葉^{天ノミ}（天ノミ）春毎の松のかさしよ藤浪を同じ根さしと誰かなしけん

風ふかはちりなん藤のあた浪をいかに契て松にかけゝん

（廿八所^神明^法葉^書）（天ノミ）咲のほる藤のしなひの夕風は松よりみゆる池のさゝ浪

散はてし山さくら戸の花の後も春は有とやかゝる藤浪

かへらぬを何かはしたふ行水にあたくらへして春の暮ぬる

名残ありとさすかをくるゝ花鳥を捨ても春のゆかんとすらん

春そたゝ行かたしらぬ半空にのこれは残る在明の月

いかにして春をしたはむ車路も船路もしらぬ空の別に

形見とやひとりをくれて咲花をちらさゝて春の立帰るらんひとかに天^り

一年の日数は春に尽してもやよひ／＼の名残やはなき

時は今春きにけらし天つ星のかけさすかたの道もかはらて

見るからに春の光や雲の上に引渡す駒の先いさむらん

天正三^正廿^六親^王家^御会^始（天ノミ）出て世にはつへき雪の白髪も山路忘るゝ春にあふらん

のとかにもけふこそ三の皇のよをおさめしる九重の春

世にふへき緑も春に龍の尾の雪をしのかん松の生末

連歌依^春句^記之^{（符）}元龜三^初雪^会次^二当^座

友と春こゝろの中を雪間哉（天ノミナシ）心のみちを（符）

註、一八 松残雪、天理・狩野本になし。

六六 山路花・六九 遠村花（遠村初花）定数歌（三）にあり重複する。

夏

一 首 夏

二 籬 卯 花

三 葵 懸 簾

四 郭 公

五

六 七 待 郭 公

八

九 待 客 聞 郭 公

一〇 郭 公 何 方

一一 郭 公 一 声

一二 郭 公 未 遍

一三 郭 公 数 声

一四 岡 郭 公

一五 菖 蒲

一六 盧 橘

一七 橘

一八 盧 橘

一九 早 苗

折にあひて涼しき色は若緑春も及はぬ梢とやみん

卯花のはなに咲すは草の戸の草のかきねとみてや過まし

契あれやおりにあふひの諸かつらけふあらたむるこすの緑に

百千鳥さえつる中になきぬともかくこそまため山郭公

人伝の声はあやなし郭公わかね覚をはなと恨むらん

かきりなき声にもあれや幾年を鳴も古さぬ山ほとゝきす

此比とこゝろをつけぬ夕たに忘れやはせしやまほとゝきす

つれなさは我にそならふ時鳥おもひよはらぬ心くらへに

人またむ里をはかれむこと（天ノミ）はりも今やしるとや鳴時鳥

すきにけりやよ郭公一声の面影のはせ横雲の空

郭公またれ／＼し一声はたくひはありともたくひともせし

まづ里のいつれまことを時鳥心みはてゝなかとやする

元龜三^四家^月次^天（天ノミ）またれこし恨はしるや時鳥声のかきりは鳴尽しても

千首^第四^百首^{（符）}しけるらん岡の葛葉のかへれとは人の秋にやなく時鳥

ふりにける軒の忍ふも色そへてあやめに匂ふ月の影哉

熱田^社法^葉（天ノミ）植て見む昔にかへる大内や三葉四葉ののきの立花

とりとめぬ風もやつらき玉簾隙もとめて匂ふ橘

今は世に忘草おふる軒端にもむかしをとめて匂ふ橘

享祿三^三九^九石^山法^葉（天ノミ）さなへとる門田の水に夏もはや稲はの風のみえて涼しき

我もそ

三 早 苗 多 山松のみとりもそふやとる跡のまどふにもあらてうふる早苗は
三 五 月 雨 鶯もたちかへりなけ枝の雨にぬれて色こき梅の紅
三 江 五 月 雨 天正三七廿八所定神明法衆
三 島 江 五 月 雨 三島江や生るますけの末葉さへ水底ふかき萩の比
三 古 宅 五 月 雨 かくてこそもるへき月を五月雨におしまむ軒の板間ともなし
三 庵 五 月 雨 はれまたに晴間もしらす五月雨は木の下庵の木々の雲に
三 夏 月 元龜二廿二聖徳太子法衆十首
三 夏 月 おしめ猶かけやとす月の行水にひくや夏麻の長からぬよは河水大
三 夏 月 葵秋より先の声もあらは花に色そへ大和撫子
三 夏 月 道通院八十賀統歌天文三四廿五
三 夏 草 露 思ふには秋の夕の露もあらし庭を夏野の草にまかせて
三 夏 草 露 大永八廿五御月次(天ナシ)
三 夏 草 露 稀にゆく跡たにとつる夏草の心のまゝに置る露哉
三 夏 草 露 千首第八百首
三 夏 草 露 やすらはゝ月出ぬへし行くもはや河の瀬にう舟さすらん
三 夏 草 露 闇をのみ待とも見えす夕浪にきほふう舟のかゝり火のかけ
三 夏 草 露 梓弓ひけは本末はる鹿は五月の闇に音をもなかなん
三 夏 草 露 千首初百首
三 夏 草 露 光もて玉にもまじる螢もや清き渚の心をはしる
三 夏 草 露 正もに(六)
三 夏 草 露 とふ螢数かく物か行水にもえてかひなきをのか思ひは
三 夏 草 露 もえ明す螢を見ても思ふ哉及なき身の窓の光を
三 夏 草 露 千首第六百首
三 夏 草 露 よなくくに光もうすしとふ螢つゝむ袂に近き秋かせよなくの(天ノミ)
三 夏 草 露 同 第五百首
三 夏 草 露 山風のしくれの雲やかへるらん木末をのほる夕立の空
三 夏 草 露 同 第九百首
三 夏 草 露 かつそむる杜の下葉やなく蟬の羽にをく露の秋をみすらん
三 夏 草 露 陰もなしさ駒とめむ鳴蟬のむすふや水の山深きこゑ
三 夏 草 露 しめてなをあくまてくまむ涼しさを負る水の名は濁るとも
三 夏 草 露 天文八王六廿五御月次(天ナシ)
三 夏 草 露 むすふ手に風吹そひて滝の糸のよるこそまされ袖の涼しさ
三 夏 草 露 夏の日も夕を秋の物思に風吹いてゝ露も落けり
三 夏 草 露 くるゝより空にまきれぬ涼しさは夏にや落る天の河なみ

三 山 納 涼 ふかゝらぬ陰にもきゆる夏の日をさそ山川の水の水上
三 山 納 涼 千首第十百首(天)
三 山 納 涼 いさきよき心はひとつ河風も七瀬にかはるみそきすらしも
三 山 納 涼 同 第五百首
三 山 納 涼 けぬるか月の木隠すゝしさは夕日の名残跡も残らて
三 山 納 涼 元龜二(三三ノミ)四家当座
三 山 納 涼 散はてし桜の山の麓河底の玉藻に花そ残れる
三 山 納 涼 夏あさき梢のせみの忍ひ音も若葉にたくふをのか羽衣
三 山 納 涼 永正三十九春日御法衆(天ノミ、永正ママ天正か)
三 山 納 涼 代々をへて鹿の伏所の春日山青葉にしける陰も木高き
三 山 納 涼 咒 夏 動 物
三 山 納 涼 一 初 秋 風 天正三七廿八所定神明法衆
三 山 納 涼 二 初 秋 朝 それなから先色かはる草木もや世にしらぬ秋の風をみすらん
三 山 納 涼 三 秋の日もまた影暑し涼しさは朝な／＼の袖のみそしる
三 山 納 涼 千首第七百首
三 山 納 涼 うちよする波も頃日はま萩のひゝきに成て浦風そ吹
三 山 納 涼 波符)
三 山 納 涼 河竹の台をちかみけふ毎にかけをみまくの星合の空
三 山 納 涼 五 乞 巧 奠 萩か花けふ織女の袂にはたちも及はぬ錦とやみん
三 山 納 涼 六 七 夕 草 花 星合のあかぬ一夜に五十年の夢もみるへき枕からなん
三 山 納 涼 七 七 夕 枕 天文十六七夕
三 山 納 涼 八 七 夕 衣 はし合のなかにかさねて月草の花染衣うつろひもせし
三 山 納 涼 九 星 河 秋 久 しるへせし稲負鳥の神代より逢てふ星の秋をまつらん
三 山 納 涼 二 星 河 秋 久 星合にすゝしさもらす天の河かよふ浮木の道やとめむ
三 山 納 涼 二 織 女 風 為 扇 はし合の橘にわたせる鶴のつはさの風を扇にもみん
三 山 納 涼 三 織 女 契 久 秋にありて幾めぐりとか星合の中にかけたる天のうきはし
三 山 納 涼 四 七 夕 別 秋かけて渡しそめけん紅葉ゝや神代もきかぬ天のうきはし
三 山 納 涼 千首第八百首
三 山 納 涼 五 今 宵 織 女 浪のまも小夜更ぬらし天河いさよふ御舟はやもよせなん
三 山 納 涼 渡 天 河 女

秋 部

三 憶牛女言志 絶しとは契りか置し天の川是や神代の水の水上

三 水辺望天河 けふ渡す橋はかさゝき鳩鳥の沖中河や天の川なみ

三 萩 おとろくもわか身にふけぬ秋ならは聞や忍はん萩の上風

三 萩風告秋 さらに今身にしむ物と成果て有しにもあらぬ萩の上風

三 深夜萩 おとろく夢もわりなし萩の葉の月出とは契らざりしを

三 萩 露 うつろはゝ露もあやなし萩原ぬれつゝ花の色はそふとも

三 置なから露をこそみ真萩原移ふ萩の枝はをるとも

三 玉はこのゆきゝしられて朝露のむらゝかはく野辺の萩原

三 面影は柳桜の真萩原春のにしきやたち残しけん

三 花の上に行あとおしむ人も真萩ちる野は道や絶なん

三 折枝に本つ葉もなき真萩原遠かた人を花やいとはん

三 千首第七百首 かはすらん根さしもゆかし女郎花ねたる真萩の同じ色に

三 同 第九百首 はゆへは といへは枕もいはし女郎花誰為ならぬ露もこそあれ

三 天正三九月尽禁中当座御会 かねなんも人やりならしおみなへしいかて契りを秋にかけゝん

三 身をしらば尾花か袖よ行人の心をしめてなとまねくらん

三 千首第五百首 ぬれてこし袖の香深き藤はかま分る野原の露はいとほし

三 置あまる露にしはれてあくる間の空たに待ぬ榎の花

三 天正三十七廿八所從御明法衆 さらてたに跡も見さりし浅ちふに誰とて深き露もはらはん

三 やとりとは露もたのむな浅ち原色かはるへき四方のあらしに

三 浅ち原陰さむくなる夕霜に入日をたのむ虫の声ゝ

三 千首第七百首 群 かくなからかれすもあれな虫の音に朝夕露は霜と成とも

三 又もこむ尾花かりふく野への庵一夜はあかす松虫のなく

三 壁の中枕の下も秋の野の露かゝりきやなく菰

三 さまゝの声の内にも草の原ひとりふり出て鈴虫のなく

四 島 辺 虫 ひとりのみ島かくれゐてなく鶯のこゝろやかはす松虫のこゑ

四 松 虫 たかかけしあたの契にいつはりのある世もしらて松虫のなく

四 心あてはとをきにもあらし鹿の音の夜深くたとる老の枕に

四 今とはとて遠さかりなん奥山の紅葉を鹿も恨てやなく

四 元龜三十七廿八(八廿九)家月次 ちらぬまもしからみふする真萩原をしかや花の嵐成らし

四 我袖は物にもあらずよなゝの涙はしるや棹鹿の声

四 朝顔の花の光もあらそふや露はつれなき稲妻のかけ

四 心とや思ひなすらむうきふしもたか為ならぬ秋の夕を

四 今宵たに枕やからん閑越てしらぬ山路の秋の夕くれ

四 うき秋はなき名成けりみる人の心にかはる夕なりせは

四 鹿の音を山田の庵の友とたにおとろかさてもしし聞なん

四 幾千里稲葉の空に雨風も手にまかせたる門田守らん

四 元龜三十八廿九家当座 かる人の稲葉の露にくらへみよもるてふ袖の何難面

四 世にしらぬ光や秋に契けんみてるは月のそ夜のみかは

四 立田姫そめてもしらし紅葉する月の桂の秋の盛は

四 身の上にかたふきはつる空の月年の半の秋を悲しき

四 月に今半天なれや白雲のくるればかへる山も忘れて

四 野分せし山の木間にもる月は松に声なき雪の下折

四 あかすとして往来の人のやすらはゝ月やさながら不破の関守

四 吹こゆる嵐の音も更にけり月をゆるさぬ関守も哉

四 難波江の月や今宵の玉柏藻にうつもれぬ光みゆらん

四 わきてたれ春の海へを思ふらん秋こそ月は住吉のはま

四 此歌私云 禁中御会月日不知之前内府于時十七歳云々

四 依為近代秀逸三反被講之希代事也

宙浦 月

いかにせん山のは見えぬ浦浪もかきり有ける月の行末(天)

空閑 居 月

私云天正三十九三夜、於親王御方当座御会十五首内、世にもれぬ光にあたる月の門こゝろにとつる蓬生もなし

月のもと

空月前草花

風を今まつらん物か草の原月に乱るゝ露の光は

空月照草花

影は匂ひ光は露をみかき出て千種に月の花や咲らん

空月前萩

元龜三十五家当座三首之内(天)、ちらすとも明日はふかみの萩か花今夜にかきる月の盛は

空

朝露にのこらて見はや終夜月につろふ庭の萩原

空竹 間 月

吹風に影さたまらぬ竹の葉はさなから月の霜そこほるゝ

空釣夫棹月

幾秋かめくりあふらんくる雁も空行月の同じ雲ぬに

空月前行客

千首第六百首、つりの糸のおさまる風をすむ月に待出けりなうたふ舟人

空月 為 友

天正三十九三夜、於親王御方当座御会十五首内、忘れすよさすか馴にし旅衣月は宮古の外にすむとも

空月旅宿友

見る人の心や空にさそふらんむかへは月のひとりともなき

空袖 上 月

露におき霜にふすよの馴てしも月はおくれぬかり枕哉

空月下搦衣

天正三十九三夜、於親王御方当座御会十五首内、折にあひて今宵は身にもとはかりに待とる袖の月やしるらん

空

夜さむをも月にわすれて唐衣うちささむ程や絶く(天)の声

空名 所 月

見る程や夜寒忘れて打音の月に隙あるから衣哉

空題 不 知

外に見ぬ月やすむらん富士のねは空の半の雪の光に

空雲 外 雁

花の上春くはゝれる年を又今宵の秋の月に見る哉

空橋 辺 雁

千首第七百首、つらねこし数こそしらね鳴雁の翅にかゝる峰の白雲

空霧 深

嶺越てけさくる雁の跡なれや初霜白し谷のかけはし

空眺 霧

同第八(五符)百首、山もとは雲もましりて立霧のうつまぬ方や入相の声

空搦衣響風

天正三十九三夜、於親王御方当座御会十五首内、明るをやとを山かつらかけて思ふ麓は霧のまた深き夜に

空搦衣欲曙

うちたゆむ里こそなけれさそひくる嵐のまゝの夜の礎は

空隣 搦 衣

初霜におとろかされて幾里かまた夜を残し衣打らん

空

千首第四百首(天)、小夜衣うつや人氣のまちは嬉しき物の夢路くるしき

空鶉

深草の里はあれゆく秋寒み鶉ひとりそ床しめてなく

空九月九日

天文十一(天ノミナシ)、移ふと種やはかはる一花も色の千種の秋の白きく

うつろふに空

空重 陽

おらて見むけふの雲の盃に光さしそふ菊の上の露

空折 初 開

天文十一、重陽公宴九首中、長月のけふ咲菊や一年の花のとたえの折を待けん

空折 菊

同上、あかすみる一本菊のこ紫おらても花に袖やふれまし

空菊 露

言の葉に滴つるけふの菊の露硯の海は千尋ならなん

空朝 菊

重陽九首内、梅か香はよりこし物を玉簾あくる朝戸に匂ふ白きく

空夕 菊

同上、はるゝ夜をまちてやみまし夕つゝの光そふへき花の八重菊

空菊 籬 月

ま砂さへ霜と見るまですむ月に盛の菊も移ひやせん

空月下 菊

重陽九首内、咲菊の空も及はぬかほりさへ月のかつらに匂ふ秋風

空雨 中 菊

同上、ほころふる花さへおもき菊の上に心もをかぬ雨もわりなし

空山路 菊

薬とる山路しられて仙人の袖の香深く匂ふ白菊

空山谷 菊

重陽九首内、尋む桃咲谷の水上也なれし山路の菊の下露

空河 辺 菊

浅き瀬のなかれにもしれ山河の淵を心のきくの下露

空水 辺 菊

重陽九首内、秋もはや今はふけぬのうらみあれや移ふ菊の芦田鶴のこゑ

空甌 宮庭 菊

あひにあひて大宮人の袖の色も匂ふか上の白菊の花

空黄菊 泛 觴

くみてしれけにつむ菊に竹の葉の千世をさかふる色も香も

空菊花 色

一年の花てふはなは色もかも種をあまたの菊に咲らん

空秋菊 盈 枝

咲そひて枝よはからし八重くの花におらるゝ秋のしらきく

空菊 契 多 秋

元龜元重陽御会、久かたの雲ゐにたかき星移霜かさなれる秋の白菊

空

君かへん年の数をや八重くにかさねて匂ふ花のしら菊

空菊 久 馥

幾かへり星うつりきて霜かはりふりせぬ秋に匂う白きく

空菊 香 春 不 如

霜の下に立ならひては春の色もけたれやせまし匂ふ白きく

空菊 有 長 生 種

咲そめしその世もとをし仙人のねるてふ石の白菊の花

二三 菊是顔齡葉 (天ナシ) 百草をわきける神農のそのかみも千年や菊の花にはしめし

二三 菊有傲霜枝 うつろはぬ秋いくかへり濃紫かさしの菊に霜はをくとも

二四 寄 菊 祝 重陽九百内(天) あひに挿すの菊も色わくや百の官の道しある世に あひにあひて(天)

二五 残 菊 句 天正三十九廿飛鳥井亭懷紙 驚もさそはれぬへし花といへは梅か香まかふ菊の筈に

二六 紅 葉 春きても花さかぬきの花ならし紅葉をみねの秋の一入

二七 紅葉待霜 道遙院八十賀天文三四廿五 もろくとも霜より後の色をみむ時雨はあさし木々の紅葉ゝ

二八 紅葉 浅 ちらてしもういづれの秋か柞原露の限の色に出まし

二九 夕 紅 葉 暮はつる色こそなけれ山本の入目をかへす木々のくれなゐ

三〇 夕露も心してをけ玉ほこのたよりにおらん木々の紅葉ゝ (天ナシ)

三一 紅 葉 霜 天正三十九廿飛鳥井亭月次懷紙 置かへす朝の霜のきえぬまは露のはへなき木々の色哉

三二 江 紅 葉 千首第八百首 ちらすなよ名にしおふ江は呉竹の千尋にふかき秋の紅葉ゝ

三三 杜 紅 葉 散しきて風の跡ある紅葉はに又色かはる杜の下草

三四 岡 紅 葉 そめそめすふかき紅葉の名なりけり八入の岡の露も時雨も

三五 暮 秋 そめつくす色はこけれと紅葉ゝの秋も今はのはてそ悲しき (天ナシ)

三六 暮 秋 夕 天正三十九月尽座御会 けふのみの秋の夕よ菊になれもみちにそめぬ心ともかな

三七 暮 秋 嵐 千首第七百首 霜さむき嵐のかねの声のうちに尾上の秋や暮んとすらん

三八 九 月 尽 同 切百首 なにをかもけふしたふらん紅葉ちり菊も移ふ秋の行ふは

三九 は つ き 元龜三三月日当座三百内・二三月日当座二百首 虫の声鹿のなく音も萩のはも半の比そ秋は悲しき

註、一二、織女契久より三七露底虫の願まで、底本は落丁。四四行、二丁分。

七九、名所月、定数歌(三)に重出。

八八、鶉、天理本高松本になし。狩野本にはあり。

八九、九〇、天理本は一一五、一一六の間にはいる。また、二一と二二、一一七と一一八は、それぞれ順が逆となっている。

二二〇、夕露もの歌、底本書き入れによるもの。他本にはなし。

二二四、底本など歌欠。天理本のみ有端として記載。定数歌四と重複のため省いたもの。今かりに、天理本にて書き入れておいた。

二二五、暮秋、天理本になし。狩野本には書き込み。

冬 部

一 初 時雨 冬 神無月いつもしくれのふるき世はしのふる袖の上にすくなり

二 初 冬 時 雨 千首第三百首 分てしる心もあやし神無月秋に聞しも同じ時雨を

三 時 雨 ちらてまつたくひ有とや薄もみち染残しても行時雨かな

四 初 時 雨 今はとてもらし染ては浮雲のつゝみもあへすふる時雨哉

五 時 雨 晴 陰 村しくれかことやかけむ見るか内に空すむ月を人にかたはら

六 枕 上 時 雨 元龜三十月次 きゝ忙ぬしくれよいかに枕せしなかれは水のひゝきながらに (天)

七 木 から し 天正三十九廿飛鳥井亭当座(天) やとらすはそれと分へき声もあらし松をつくさぬ峰の風

八 落 葉 散のこる一葉はかりの冬木には又今さらの秋の初風

九 千首第三百首 心がらもろくもちるやさそふらん嵐のまゝの木葉ともなき

一〇 風 前 落 葉 日吉社法衆 声あるはもろからぬをも山風のしゐてやさそふ木葉成らん

一一 落 葉 交 雨 それとしもまぎれし物を軒の雨にぬれて木葉の音をすくなき

一二 橋 上 落 葉 とふ人も有とや見えむ板橋の落葉かうへに木枯の跡

一三 見 残 菊 年さむき松たにしはむ霜の後もきえぬ色かそ菊にあやしき

一四 残 菊 帶 霜 天正三十廿一御会 百敷や瓦の霜の花の色もきくにかさなるをしの毛衣

一五 寒 庭 霜 愛宕法衆十首中元龜元 年寒き緑は霜に埋れてけふりもしらぬ宿の松かえ

一六 鶴 弘 霜 千首第六百首 あしたつのはらふ跡よりましらゝの浜松か枝の霜の寒けさ

一七 寒 草 享禄三九石山法衆統百首 日にそへて風の答も霜の下に声よはり行庭の萩原 (天)

一八 塙 根 寒 草 おほ(天) おれかへる陰にも草のあらはれて隔も深き霜の芦垣

一九 寒 草 霜 天正三十七廿八所定神明法衆 冬枯し尾花か本の草の上に置もならはぬ霜やまよはん

二〇 枯 草 めもはるにみしはそれとも波の下にあらぬ枯生草の寒けさ

二一 氷 初 結 とちやられてまたひとへなる朝水下行水の声もへたてし

二二 昨日けふまたひとへたに行水に数かくはかり薄水かな

三水留水声 行水やいつら氷にさえし夜の岩まにむせふ松の下風
千首第六百首
四石間氷 ゆきやらて水さへむせふ岩かねを便にとつる朝氷哉
五池氷 鴛鴨の羽風隙なき池水にいかて氷のむすひとつらん
元亀元十一兼日二首横紙
六江氷 をのつからむすふ氷もえにしあれや木葉ふりしく水のとみは
熱田社法条
七湊氷 さす橋にくたけはてゝも湊河舟出し跡や又氷るらん
樹の行
八冬月 わきて猶くもらぬ月の影なれや高ねの雪に光かはして
霜とおち雪とつもりて冬の夜は月を限にすめる空哉
九寒夜月 玉簾まきあけて見む深き夜の月に間近き嶺の初ゆき
遠さかる浪も氷らてしかの浦の沖を汀に千鳥鳴なり
天正三十一御会(天ノミ)
三湖水鳥 おもからぬ霜やあやしき影さゆる月打はらふ鴛の羽風は
ぬるかもの影もあらはに霜枯にをのか青羽を猶たのむらん
三鴨 みる夢の末もとをさて声の屋のあられ落くる夜はの山風
千首第八百首
四屋上霰 ちりて後また穂に出る花薄下葉かくれぬ雪と見る
五柴霰 ふきかへす葉風の色は雪なからあられ落くる嶺の椎柴
六浅雪 いかて世の秋くる道にをくれけんけさはつ雁のはつ雁の声
毛残雁 降そめし一重をそ思ふ草も木もけちめわかれぬ雪の夕は
元 道はけさ夏野の草のしけるにもかくやはたえしつものしら雪
日吉法条(六)
四雪散風 面影の花をやさそふ雪の色は枝も匂はぬ木々の朝風
三首当座元亀元
四行路雪 誰をとひたれをむかへて今朝の朝け跡なき雪の通路もなし
山間の閑路絶たる雪の中にすゝまぬ駒の心をそしる
五松雪 下折の松なかりせはふかき夜に積れる雪の声をきかめや
天文三十四五道通院前内府八十賀統歌
六松雪 松の葉はふりそふ雪の白髪にかつあらはるゝ千代の陰かも
哭遠嶺雪 隔ある山の幾重のかひかねとさやに見えしは雪を積れる

望遠望山雪 一首横紙元亀元
あつめこし光にたくふ秋の菊のこれる色や窓の白雪
哭野雪 色付はまた程もなき矢田の野の浅茅にかゝる嶺の淡雪
元亀元(天ノミナシ)
哭雪中会友 よしさらはつきてふらんけさの雪跡見え初る蓬生の宿
私云雪朝各入来之時儀云々 (天ノミナシ)
吾不知題 ならしてもみるへき窓にあらねはや積りもあへぬ枝の白雪
三鷹狩 雲の上に千里の月もさそなみし君か園生の雪の明仄
千首第九百首
五鷹狩 雪の上の行幸のみかは御狩野やたつる使の道も残らん
ふみたつる狩はの雉子雪の上はしはしくれん陰たにも
六鷹狩 かねるさの山の下柴枝ことに狩はなからの雪を見せはや
打きらしみそるゝ野への狩衣ぬれてやとりの立空もなき
千首初百首
五炭竈 雪なから松よりのほる夕煙ときしらぬ色や嶺の炭かま
春ちかみたつる煙ののとけさや霞をいそく嶺の炭かま
五埋火 さゆる夜のまやのあまりに吹落る嵐もしらぬ埋火のもと
天正三十七八所定神明法条
五埋火 片敷の枕のとけき埋火は春にまされる夢のみしかさ
天正七十六廿四(天ノミ)
五埋火 むかふより心の中の春やとき花もやをそき埋火の本
元亀元十二廿家月次金三首ノ内
五埋火 ありあひて灰に書けつ筆の跡も昔ににたる埋火のもと
三神楽 かけうすき庭火を寒み晝夜深き声そ霜に残れる
愛宕法条千首内元亀元
空月前神楽 ます鏡光をともし本つ枝に月をかけてもうたふ榊葉
とめし(天ノミ)
五年内梅 花の後の花もや有と秋の菊匂ひもきえて咲る梅かえ
元亀元十二廿家月次金三首ノ内
五雪中早梅 冬枯の立枝むれぬ梅か枝に花のたねより雪や散らん
行年をいそぎやなれん廻りあふ千年の春を君にまつとて
千首第十百首
五歳暮雪 やすけくもくれてよ星の逢事の三といふなる今年と思へは
いつのまにつもりはてけん月日そと雪をおとろく年の暮哉
五歳暮急 おこたらず朝にいそく百敷の道はかた／＼年や行らん

越来しも今ゆくとしも逢坂の関路まさしく守人そなき

恋部

- 一初 恋 ならはねは何をか恋のと計は心のはむことはりもなし
元龜三十月次
 二思不言恋 いはゝこそこたへもきかめ心もてしゝまにならふ我そあやなき
 三忍涙恋 音になかぬ程はとかめぬ袖ならは涙はよしやまきはしてん
 四忍経年恋 しられしなみゆらん物を年月はさも打出ぬ思成とも
 五共忍恋 もらすなよつもの歎の年月も同じ心を思ひ出にして
 六人伝恋 ひたふるにえそ打出ぬ便とてたのむ便もあたのたのみは
熱田社法衆
 七聞恋 たつねしる便うれしき人の上はかたるか中にそふ思ひ哉
 八見恋 言の葉もかはしてし哉櫓の戸の隙もとめつゝむかふ俤
 九 ことのほもかはす計の折くはさすかはなれぬえにしならすや
三首懷紙(天ノミナシ)
 〇白地恋 悔しくも引て返りし浦波の名残もしらす袖にかけゝる
 二通書恋 折ふしのこたへ計はうと(の天ノミ)きにもあらぬ物からそふ思ひ哉
元龜三十九家当座
 三尋恋 たるともしゐてをとはむ小野山やしるへあやしき道の行急は
や(天ノミ)
 三折久恋 神垣やしるしなきにも引しめのくちん日まてを猶やたのまん
る(天ノミ)
 四祈難逢恋 神になと身をまかせけん末終に報のまゝの契成せは
 五契恋 松もくちいはほも尽るその世にもかはらぬ色に相思はなん
ま(天ノミ)
 六尋契恋 元龜三二中院亭初御法衆、初卿(天ノミ)
 待えてはいつかねも見む初草のわかはのうへの生たゝむよを
 七見不逢恋 たのますよ身にそふ影はそれなから月の桂を心成とは

- 元 疑 真 偽 恋 恋
たのむにはいつれか狐あちきなく我実をも人の^{は天ノミ}はからは
うらなきに語るも何かたのまゝしかたる人めをなせ有^{と天ノ}まて
三 連 夜 待 恋 恋
夕月夜在明の空にうつるまてとはぬを頼む我そつれなき
又や見むかくたまさかの夢のまにかへし命の明日も残らは
三 逢 恋 恋
たえさらは待見さらめや契とて牛女斗年にありとも
元龜二三月日飛鳥井亭當座
五 別 恋 恋
入にけむ袖の中にもとめをか別をしらぬ身とや成なん
六 後 朝 恋 恋
おき出し今朝の心は朝寝かみ乱れしよりも乱てそ思ふ
なとか身のやかと消なて草の原こたへぬ露におき別けん
元 名 立 恋 恋
我のみそいさとこたえむいさや河世になかれてのうき名成とも
五 欲 頭 恋 恋
問人にいかゝこたへん秋ならぬ涙の袖の色の千しほは
千首第十百首
三 夕 恋 恋
おもひ佐ぬおくる朝にくらふればとはぬにつらき夕ならしを
おもひ佐ぬ^{美ナシ}おくる朝にくらふればとはぬにつらき夕ならしを
三 厭 恋 恋
笠ゆひの島こきかへる船を見よなきたるあさに思ふ心を
天正三九廿飛鳥井亭月次機紙
三 選 近 恋 恋
身の秋の風吹そふ床夏に打はらふ露も又やつもらん
三 久 恋 恋
うこきなき人の心のいはを^{は天ノ}のみつくしもはてぬ天の羽衣
千首第八百首(天ノ)
五 等 思 兩 人 恋 恋
年月をふる川のへにたてる木の心を分て又も逢みむ
何となき我おこたりの其まゝに人のかことになしてはてぬる
毛 忘 恋 恋
身^{なしかはてつる天ノ}のよそになしてやせて慰まん昔語にみすしらぬよは
六 被 忘 恋 恋
身^{なしかはてつる天ノ}のよそになしてやせて慰まん昔語にみすしらぬよは
元 忘 久 恋 恋
限りあれなあらす成行はてをたに見はてんと思ふ心長さも
四 恨 恋 恋
しらすやはわかことはりのいへはえにふかき恨も思ふ故そと
四 怨 恋 恋
いはしたゝ思ひしるへき心あらはかくまて積るつらさならしを

四

望 恋 水

望 恋 涙

望 恋 涙

望 恋 涙

望 恋 涙

望 恋 涙

望 恋 涙

望 恋 涙

望 恋 涙

望 恋 涙

望 恋 涙

望 恋 涙

望 恋 涙

望 恋 涙

望 恋 涙

望 恋 涙

望 恋 涙

望 恋 涙

望 恋 涙

望 恋 涙

望 恋 涙

望 恋 涙

望 恋 涙

いはゞ只こは身のとかそうしと思ふ心よりこそ深き恨を

思ひ侘水のうたかたなかれての身に頼むへき行末もなし

もらさしと思ふ頼みもはかなきは心の外の涙成けり

かはくまも涙をのこふ袖の上は朽て思ひの程や見えまし

横柱手なれしことの形見ゆへなき世にゝたる物や思はん

元色三月廿八日当座二首内

稀なれと雁のくもちはさはらしを便そ人にうはの空なる

のせて行例もあるを天つ風うはの空なるしるへたにせよ

同し世にまよふ心もはかなしや只天雲のよそにのみして

おもひ侘ぬ下葉もしるや守山の露にかはらぬうき名也とは

待そ見む暁しらぬ夢もあらはかはす枕はうつゝならても

いとしく猶そはるけき武蔵野とかこたむ故もそれならぬ身は

関守も鳥か音なれやあふ坂を人にゆるさぬ東雲の空

さしてその名を頼みこし逢坂に越ての後の関はへたてし

妹せ山かけてもしらし漣つなみ物思ふ袖の中に在とは

かひなしやしらぬに生るねぬなはのくるしき上に身をつくしても

わか袖にかけしも悔し異浦に立かはりける浪の心を

はし侘ぬ浦のはまゆふ隔置てかさねぬ中のよるの衣は

越てしも人の心のいは木山またやこぬみの浪にぬれなん

忘るゝをひとつ種なる草ならて忍ぶとたにも人にしらせし

徒に朽てややまん空穂木の中に思ひの有もかひなし

朝夕にみるめなきさの恨をは我からさきの松もしりきや

思ふことよく物いはゝ心なき鳥にも伝恨成しを

夏浅き梢の蟬の忍ひねも若はにたくふをのか羽衣

突 寄 枕 恋

突 寄 枕 恋

突 寄 枕 恋

突 寄 枕 恋

突 寄 枕 恋

突 寄 枕 恋

突 寄 枕 恋

突 寄 枕 恋

突 寄 枕 恋

突 寄 枕 恋

突 寄 枕 恋

突 寄 枕 恋

突 寄 枕 恋

突 寄 枕 恋

突 寄 枕 恋

突 寄 枕 恋

突 寄 枕 恋

突 寄 枕 恋

突 寄 枕 恋

突 寄 枕 恋

突 寄 枕 恋

突 寄 枕 恋

突 寄 枕 恋

突 寄 枕 恋

千首第三首

逢と見し夢さへうとし徒に丸木の枕丸ねせよとや

馴来しを思ひ出てや慰まむ古き枕とふるさるゝ身は

おとろくに夢を苦しきかり枕思ひ絶ては扱もねしよを

夢よ夢さても程なく明るまのかさねもあへぬ夜の衣は

つみをきて人に見せはや恋草を力車の足よはきまで

三首之当座之内元色元(天)

人こゝろゆるす綱手は中くにつなかぬ舟のよるかたそなき

堀江こく朱のそは舟よそにのみそれと斗もみてややみなん

一六、わかはこのうへの以下底本は欠。

一九、疑真偽恋、天理・狩野本は二一の次に、臨朝変初恋として入

二〇、偽恋の次に、天理・狩野本は次の歌を入れている。

立うかれ我やゆかんのいさよひもかたふくまでに月そふけぬる

二四、初逢恋の次に、天理・狩野本は次の歌を入れている。

とけかたき心もさそなさ夜まぐらまた世をしらぬほととみるにも

雑 部

一 雑 天 象

二 眺 遠 情

三 雲 浮 野 水

四 塩 屋 煙

五 燈

六 窓

永正三十九春日社御法業統百首(天ノミ、天正カ)

わが君の恵みの露も限りなく仰く心や空にみつらん

愛宕法業十首中元色元

水底に行かと思えて沢の名の雲もたゝよふ風のさゝなみ

うき業をしはやく衣いとまなみ思ひもみえて立煙哉

しほなれて海土のたくもにすむ虫の思ひの煙行方やなき

七岡 篠 天正三十廿一御会 駒つなく陰とそなれる草枯の跡の小笹を己が往来に 駒なつく天
八飛滝音信 いさきよきひゞきのみかは塵の世の色にもそめぬ滝の白糸
九橋 音にきく木曾のかけちの橋よりも世を渡へき道そあやうき
永禄十三正十九御会
二池水久澄 色かへぬ池の心のふかみとり松と竹との水のまに／＼
名にしおふ三の島をも九重の春にせき入る庭の池水
三 鶴亀の千年もあかす池水の底るしられぬ春をかさねん
千首第五百首
三沼 水 あひにあふ今日の手向やかくれぬのむれもはてぬ水茎の跡
千首第五百首
四晴後遠水 ゆかはやな霧もまよはぬ山本の夕川波は月を待らん
千首第八百首
五寄水雑 絶せしと契りし君か御もすそや流て世々の水の水上
六名所浦 ひかれてのよるへやいかゞ漕舟の綱手たゞよふ和歌の浦波
七 山とのみ見しは物かは富士のねの雪をひたせる田子の浦波
八岸 苔 苔蒔しけるみとりのすゝしさは岸の柳の風も及はし
天正三十七廿八所定神明法業
九庭 苔 はらはぬも塵こそなけれをのつからかさなる苔に庭をまかせて
元龜三十八九家当座
二巖 松 春秋の色にうこかぬいはほより苔にねさしや生はしめけん
三巖 松 誰をかもとはかりしは老か世に陰高砂の松もむつまじ
三巖 上 松 陰たかみ松より外に行やらて思はすかゝる嶺の白雲
天正三十九御会始(天)改名栗枝(符)
三松 歴 年 世にもれぬ春の恵みは十とせあまり八とせやまたん宿の松かえ
元龜二十十九御会始俄不不諱進
四松樹契久 住吉やいはひ初てし神代より松を言葉の種とうへけん
五砌 松 霜の後かねてそみゆる色かへぬみかきの松の千代の生末
元龜二十十七於飛鳥井雅俊亭(符)
六庭 上 松 いやつきに庭のをしへのよゝをへてわか家の園や和かのはままつ
七松風調琴 梢まてはへるかつらのをのつからことにむせふ松風の声
八竹 為 友 くれ竹に陰をそたのむ高砂の松は及はぬ昔成けり
(卅八所定神明・書本)
九故郷草 あれにしは心ならねと壁におふることなし草そつむにかひ有
三水郷草 夏刈の跡ともみえず難波江や陰深き芦の所せきまで

三庭 鶴 世々をへむ庭の蓬か島の中はまかせはつへきあしたつのこゑ
三名所鶴 しるへせよ老をもしらてすむ鶴は蓬か島の道なからめや
三鶴 帰 阜 沢辺には春行雁を浦波のうら山しとや芦たつの声
千首第二百首
四島 鶴 四方の波音にもたてす秋津島雲ゐのたつの声斗して
なみの(天)
五鶴宿松樹 春に今はや木たかゝれひな鶴の千世をならへん庭の松かえ
熱田社法業
六禰 覺 世にふれば思ひある身のね覚より鳥もや声に鳴はしめけん
天龜一三家月次
七夜嶺猿叫 住はてぬ心にあさき山の奥をおとろく猿の眺のこゑ
天龜一三家月次
八淵 亀 水底に世をふる亀も山河の淵も幾度瀬にかはるらん
九古寺 滝 山たかみ住あと残す仙人のたちぬはぬ衣や滝の白糸
四古寺 鐘 けふも又暮ぬとおもへは鐘の音に心くたくる嶺の松かせ
四古寺 庵 入相のひゞきそ匂ふ山鳥の尾上にかゝる花のしら雲
元龜三十二水無瀬殿法業十首(内)
四山 家 庵 大内や今をむかしにくらふれば雨を袖なる草の庵哉
四山 家 天か下をひとつ都におさめをかはへたてん山のおくやなからん
四山 家 朝 夜の雨にさそな名残の朝しめりけふりもあへぬ山の下柴
千首第九百首
四山 家 夕 暮はてゝ鳥たになかぬ夕こそまことの山の奥もしりけれ
や、市(天)
四山 家 嵐 しつけさを山ともいはし朝市のこゑもさなから立嵐哉
り(符)
四山 亭人稀 かくてこそ心になかなふ山ならめ人をまたし人もまたしな
天正三十七廿八所定神明法業は(天)
四田 家 鳥 立とみて田面はなれぬ村鳥のおとろかすをもさすか馴なん
日吉御法業(天)
四渡 舟 誰を送りたれをまつらん渡舟行も帰るも同じ浪路に
四(八ノミ)
四漁 舟 世の浪にまかせてやみん釣の糸のおさむる筋は心ながらも
四漁 舟 思ふにはこゝろのくまもなみの上に何かあらそふ蟹の釣舟
四島 漁 客 こそ出しあまの小船の行ゑかと浪まにまかふ浦のはつ鳥
元龜三十二聖徳太子法業千首
四眺 望 思ふには唐船ののりの道も渡すにちかき浪の上かな

登 海路眺望 追風やいかゝそふらむみるか内に出し舟もはや沖つ浪
とふ鳥のみる／＼浦に湊入のほにあらはるゝ沖の友舟
元龜元三首当座之内(天)

登 望遠帆

登 旅行

登 旅宿眺夢

登 海路

登 名所旅泊

登 寄野驕旅

登 寄関驕旅

登 驕中衣

登 驕中風吟

登 述懷

登 逐日述懷

登 独述懷

登 晚述懷

登 寄花述懷

登 寄名所述懷

登 懷旧

登 月前懷旧

登 寄世懷旧

登 往事如夢

登 晚眠易覺

登 秣教

天 荒 千首初百首
神垣の内外もおなし光かな界ふたつものとの悟は
荒化城喻品 夏ふかく茂りにけりな宮城のゝ草斗なる根さしなからも
み(天ノミ)

登 敵王品

登 神祇

登 外宮にはしめてまうてけるに

登 時しありてけふ宮川の水底の清きを神の心とそしる

登 はしめて内宮にて

登 かけ初し心の注連の一すちにたのむ神路のおくを尋ん

登 移しきて都はなれぬ宮つくり君も三笠と陰おほふらん

登 或人天神賛所望の間左に書之

登 おさめしる誠の道を仰きみむ朱の玉垣板間あふ世に

登 川上や天くたりにし道しより千々の社も跡をたれけん

登 跡たれし世も遠けれと宮柱立かふる年に末はかきらし

登 かくしけむ光をかへす榊葉や世々の月日の天のかく山

登 生初しそのみぬ世まで春日山はるかにあふく嶺の榊葉

登 照せなを国の最中の日の御影豊坂のほる道もはるかに

登 新はりのつくはを分し跡とめて治むる国は神にまかせん

登 あふきみよ出る朝日もかけそへてよにもくもらぬ君か恵みを

登 ある物と声をも香をも花鳥に忘れてうつ姿をそみる

登 今よりはとりてたにみし玉匣明なほ老に老もそふやと

登 桂林集の奥に

登 花に咲紅葉にそむる言のはは手にとる月の桂とそみる

登 大江元就詠草のおくに

を

神やしる承引道もわか国と世を敷しまの大和言のは

註、

歌順について、狩野本の四、五、六の三首が五七、五八の間にはい

る。天理本では、一、二、山雪、三、野風、七、四、五、六、八の

順、また五七、五六の順になつてゐる。

一三、一四の間に、狩野本、江水を入れる。これは江氷で冬の部二
六にある。

六六、六七の間に、天理本は冬部五〇を、逐日述懐として入れてい
る。

七二、懷旧に、天理本、左の歌二首を入れる。

天文八十三 道遙院三廻

冬草のかれてもとらんさかの山残るしるしや千世のふる道

天正十三 称名院右府十三回

うけつかぬみのをこたりのかなしきは昔のしたなる名もや朽なん
八〇、敝王品、天理本では、次のごとし。「うけつかぬ」は右の歌
のことである。

天正十三 称名院右大臣十三回

跡とめていかとこえむ二子山をしへし道のしるしあらすは

九三、天理本は称名院歟と注しているが、称名院家集雜一三四にで
ている。

此三光院前内府実枝公御詠者野々宮

中将定基朝臣所集給也依奉懇願被恩

免之令書写校合畢努々不可他見者也

元禄十五年午大呂上幹 雲泉子

蒙 定基朝臣之許可云泉手本之本

写之

元禄十六年癸未四月中浣 六廳軒幸隆

* 助教授 一般教科

** 講師 一般教科

昭和四十二年十二月十一日受理